



地元で長くかかわった、思い出深い苫前漁港で

本誌6月号の表紙を飾った苫小牧港。平成29年度に港湾で全国初の屋根付き岸壁を漁港区の汐見地区に完成させ、現在も第3期工事が進められています。平成29年度の第1期工事で現場代理人を務めたのが、留萌市に本社を置く堀松建設工業(株)の花田一仁さんです。今年は斜里町のウトロ漁港の現場に出向いている花田さん。週末に帰宅した花田さんに、本社でお話をお聞きました。

地元の熱い思いを受け止めて

留萌港や羽幌港、苫前漁港など、地元の留萌管内をはじめ、道東などでも数多く港の工事にかかわってきた堀松建設工業。留萌市に隣接する小平町出身の花田さんは、留萌工業高等学校(現留萌高等学校)を卒業し、地元最大手の同社に入社しました。入社後初の現場は、増毛町のゴルフ場造成工事。その後、港の現場を担当するようになり、「9割くらいが港の仕事です」と笑います。

同社が様似町の(株)南組とのJVで苫小牧港の工事を請け負うのは、これが初めて。「工事は常に発注者さんと相談しながら進めていたの、普段の現場と大きな違いはありませんでした。ただ、苫小牧は土地勘がないので、そこは苦労しました」と花田さん。クレーンやダンプ、廃棄物処理など下請け業者の選定をはじめ、宿舍やお弁当の手配まで、細々とした準備もすべて花田さんが仕切らなければなりません。地元の協力会社からの紹介や上司のアドバイスなどの支援を受けて、何とか乗り切ることができました。

何より工事が始まって実感したのが、地元の熱い思い。これまで漁港では屋根付き岸壁が整備されてきていましたが、港湾ではそれまで例がなく、同港の漁港区を拠点とする漁業者にとっては、悲願のものでした。また、汐見地区の係留施設は建設から50年以上が経過し、老朽化への対応も待った無しでした。それまでは露天作業による水産物の品質低下や、暴風や寒さの中での網外しなど、衛生や労働環境面が課題になってお

仮囲いをし、狭いスペースを工夫して工事を進めた苫小牧港漁港区

り、苫小牧漁業協同組合など関係者が以前から改善に向けて、声を挙げていました。

苫小牧港は、水産物の輸出額で全国第2位（平成29年）を誇る重要な港です。そこで国土交通省港湾局では、農水産物の輸出促進に向けた施設整備に対する支援制度を創設。苫小牧港を含む道内6港湾管理者が連携して策定した「農水産物輸出促進計画」を全国で初めて認定し、これに基づく施設整備として、苫小牧港漁港区の屋根付き岸壁が第一号として整備されることになったのです。

「現場のすぐ横に漁組さんの事務所があって、毎日のように現場に顔を出されていました。地元の皆さんの熱い思いと、それを動かす力を肌で感じました」と当時を振り返ります。

現場は会社のようなもの

これまで多く港の工事を手掛けてきただけあって「工事は淡々と進めました」と花田さん。工夫が必要だったのは、現場内の作業スペースの確保です。全体的に空間が狭く、安全性を確保しながら資材の置き場や機械の配置などのやりくりは大変でした。

また、現場の裏には水揚げした水産物を選別する施設があり、近くに地元名産のホッキ貝を使ったカレーが評判の「マルトマ食堂」という人気店もあるため、衛生や景観に配慮して工事現場を仮囲いして環境にも気を配りました。既設構造物の撤去作業では、近くの建物に影響が及ばないように振動を測定し、振動レベルを調整できる機械を選定するなど、「これまでの工事であまり経験のない、いろいろな配慮がありました」と、いい経験になったようです。

週1回の発注者との工程会議のほかに、苫小牧漁業協同組合への報告も欠かせませんでした。「今までの工事では漁組さんへの報告という要請はなかったので、本当に力を入れていることがわかりました。工事に関連していろいろな協力をお願いできるので助かりました」と言います。そんな地元の思いを受け止めていたため、工事が完了したときは「ほっとしました」と表情がゆるみます。



工事期間はタイトだったものの、天候にも恵まれ、綿密な工程会議による調整、あらかじめ工場で屋根や柱、壁などを製作して現場で部材を組み立てるプレキャスト工法の採用などで、ほぼ予定通りのスケジュールで工事を終えることができました。「屋根の工事は当社の建築が担当しましたが、土木の工事が遅れると、そちらに影響が出てきます。現場が終わるまでは、みんなが一つのチーム。大げさに言うと一つの会社と一緒に」と言います。工事中の苦労は、完成すると忘れてしまうと言う花田さん。「完成した施設を喜んで使っていただけることが、この仕事のやりがい。苫小牧港の仕事は、地元の協力なしではできなかった」と、当時の日々を思い出しているようでした。

港の環境向上で漁業者に恩返し

現在、苫小牧港は第3期工事が進んでおり、花田さんは第2・3期工事を後輩に引き継ぎ、現在はウトロ漁港の現場に出向いています。地元管内で平成18～24年度にかかわった苫前漁港は、国土交通省北海道開発局長表彰を受賞した思い出のある現場でしたが、「苫小牧港も思い出深い現場になりました」と笑顔です。

社内では、花田さんのコミュニケーション力に定評があります。発注者をはじめ関係者にしっかりと論理的に説明ができ、初対面の人でも信頼を寄せてもらえるなど、これまでの実績を踏まえて花田さんが苫小牧港の先発隊のリーダーとして選ばれたそうです。

花田さんのお父さんは漁師でした。「父の跡は継ぎませんが、港の環境を向上させる工事にかかわることで、漁業者の皆さんに恩返しができているのでは」と心の底に秘めていた思いも語ってくれました。